

『病院覚え書』を読む

— 「ナイチンゲール看護研究会・滋賀」の歩み—

Learning from “Notes on Hospitals”

Based on the Progress of Nightingale Nursing Study Society in Shiga

桶河華代¹⁾*, 高島留美¹⁾, 松井克奈子²⁾, 後藤直樹²⁾, 岸本沙希²⁾,
 國松秀美³⁾, 出石万希子⁴⁾, 吉永典子⁵⁾, 浅居美樹⁶⁾, 城ヶ端初子²⁾

Kayo Okegawa, Rumi Takashima, Kanako Matsui, Naoki Goto, Saki Kishimoto,
 Hidemi Kunimatsu, Makiko Deishi, Noriko Yoshinaga, Miki Asai, Hatsuko Jougahana

キーワード ナイチンゲール, 病院覚え書, 看護思想, 看護実践, 臨床の看護職, 教員

Key Words F. Nightingale, Notes on Hospitals, nursing thought, nursing practice, clinical nursing staff, teaching staff

I. はじめに

「ナイチンゲール看護研究会・滋賀」は、「看護とは」を今一度考えたいという臨床と教育の看護職の強い思いから、2015年10月に発足した自主的研究会である。研究会は、毎月例会を開催し、『看護覚え書』(Florence Nightingale, 1860)を読み解き、当時と現在の病院の環境や看護実践と比較し学びを蓄積してきた(城ヶ端ら, 2017;桶河ら, 2019;城ヶ端, 2019)。また、ナイチンゲールの看護思想を学ぶことで、当時の時代背景の理解も深めつつある。2018年6月からは『病院覚え書』(Florence Nightingale, 1863)を読み解き、病院の構造や環境、看護の専門性についてより学びを深めている。そこで、『病院覚え書』の最終の例会を参加者で振り返り、学びを報告する。

II. 研究会の学びの概要

1. 第29回例会(ナイチンゲールの活躍時代の病院・救貧院の状況, 病院の組織, 医師・看護師の役割)

1) ナイチンゲールの活躍時代の病院・救貧院の状況

当時の英国には、病人を世話する施設が2種類存在したといわれている。1つは篤志病院(ボランティア・ホスピタル)、もう1つは救貧院(ワークハウス)である。

(1) 病院の状況

「病院が病人の治療に重要な役割を果たすようになったのは、わずかにここ100年のことである。多くの病院が18世紀になって開設されたが、1800年の入院患者は約3000人にすぎなかった」(B. Abel-Smith, 1971)といわれる。病院は不衛生で、劣悪な環境と運営化にあった。

(2) 救貧院の状況

病院に比べて遅れて発達したが、収容の患者数

1) 聖泉大学看護学部看護学科 School of Nursing, Seisen University

2) 聖泉大学大学院看護学研究科 Graduate School of Nursing, Seisen University

3) 梅花女子大学看護保健学部看護学科 Faculty of Nursing and Health Care Baika Women's University

4) 聖泉大学別科助産専攻 Department of Midwifery Majors, Seisen University

5) 近江八幡市立総合医療センター Omihachiman Community Medical Center

6) 財団法人豊郷病院 Toyosato Hospital

* E-Mail okegaw-k@seisen.ac.jp

は19世紀に入ると病院より上まわり、家族がいれば、家族に看護してもらうものの、家族もなく貧しい人々が収容されていた。本来、救貧法（16世紀以来、イギリスで行われた貧民救済のための法律）の保護の下に設置された救貧院は、救貧の人たちと家族を収容し、何らかの仕事を与えることによって、彼らが家庭にいた場合に要した経費を切りつめるねらいから建設されたものである。

2) 病院看護の組織

「病院覚え書」(Florence Nightingale, 1863)の付録に病院看護のさまざまな組織について記されている。看護師の調達という重要な問題は、どのような看護組織が用いられているかによって非常に左右される。病人にとってのよい看護とは、プロテスタントおよびカトリックの尼僧で非宗教的当局が運営する病院で仕事をする者たちの間では、かなり高い水準の病人の世話が行われており、また高い道德意識が行きわたっていた。

3) 医師・看護師の役割

『ナイチンゲール言葉集 看護への遺産』(薄井, 1995)の一部を使用して、医師と看護師の役割について振り返る。

(1) 医師の場合

今日のように職業内容が定められ社会的地位が確立し、保全されるようになったのは19世紀半ばになってからである。それまでは、はっきりした階級制があり、外科医の社会的地位は内科医より低く、もっぱら外科的処置しかできず、与薬は内科医の仕事であった。

(2) 看護師の場合

Florence Nightingale (1882) は、「20年前のよい看護師は、現在の内科医や外科医から要求される仕事の20分の1の仕事をしていればよかった」と述べている。これからの看護師は、24時間をすべてその要求される仕事を理解しつつ、観察ができ実践し、見てきた事実を医師に報告する役割が求められている。

4) 研究会での議論

研究会では次のような意見が出され議論された。

- ・保育士に関して、指定保育士養成施設を卒業後も約半数以上も保育所に就職していない。介護職に関しては資格がなくても働いている。そのため、保育や介護はだれにでもできる仕事であると思われるのではないかと。看護は、150

年前のナイチンゲールの看護思想から受け継がれ、継承できたからこそ専門職として今日に至ると思われる。

- ・看護基礎教育では、専門学校から大学、修士課程や博士課程が増加している。看護師の専門性は、認定看護師、専門看護師、特定行為に係る看護師へと進んでいる。医師と違うところは、治療が必要だと判断するだけでなく、苦痛の軽減、安楽な体位、安全性を考えて、どのように患者に手をさしのべるか、トータルでみることができる。このあたりが、看護の専門性ではないか。
- ・男性看護師も増加しつつあるが、女性の専門職集団としては、圧倒的に大きいものである。それは、結婚し子どもを産んでも継続していきけるように職場環境を整えてきた歴史がある。医師に関しては、産休や育児休暇を取得する環境はほとんどなく、2018年に発覚した医学部入試の不正問題でも明らかかなように男性が多い職業である。看護の臨床で働きながら結婚、出産を経験し、看護に迷ったら看護理論を読み返して、「ああ、そうか」と納得して看護実践を継続してきた。研究会に参加することで、専門職として自分の今までは間違っていないと確認できた。
- ・ナイチンゲールは、看護管理者の重要性を指摘していた。師長として医療安全の面からもスタッフをどう配置するのか、多職種とどう連携して役割分担していくのか考えていく必要がある。臨床の能力というのは、「お水がのみたい」という患者に、すぐにお水を準備するのではなく、術前や検査、治療のための水分制限なのか、しっかりアセスメントしインシデントにならないような教育が必要である。

2. 第30回例会（「病院のそなえるべき第一の必要条件」の検討）

「病院のそなえるべき第一の必要条件は、患者に害を与えないことである」(Florence Nightingale, 1863)を検討する。

1) 現代の病院はどのようなところか

看護職の約7割は施設内（主に病院）で仕事をしている。病気になった折に治療、ケアを受ける場所であり、現代では誕生から死までの現象を引き受ける場となっている。しかし、病院という場

は、病人にとっての「生活の場」としての条件が求められる。

(1) 病院そのもののあり方（ナイチンゲールの見解）

社会の中に病院の存在が必要であるならば、その「病院の本来の機能はできるだけ病人に健康を回復させるということにある」（Florence Nightingale, 1863）という。しかし、その目的を忘れ、値段や交通の便とか、好き嫌いによって病院の建築場所を決めている。

(2) 入院期間はどれくらいか

病院に患者をどれくらいの期間入院させればよいかという Floreance Nightingale (1863) は、「内科的ないし外科的治療処置が絶対に必要である時期を過ぎたならば、いかなる患者も、一日たりとも長く病院にとどまるべきではない」といい、回復期のための病棟の構造や急性期の患者と同じ病室にいてはならないと主張する。そして、当時からどんな立派な施設よりも、自宅に住むことが人間として幸せなことであるとも指摘している。

2) 回復過程を妨げる「害」について（病院環境のあり方）

金井（2014）は、「ナイチンゲールの看護思想を理解するうえで重要なことは、3つのキーワード“自然”“life”“生命力”である」といい、「患者にとって最良の環境とは、その時この患者の生命力の消耗を最小限になるように整えられた生活環境のあり方である」という（金井，2014）。

3) 研究会での議論

回復過程を決定づける3つの要因である「空気の質」「食事の質」「かかわりの質」の問題について議論した。

- ・ 空気の質に関して、現在は医療安全の面から、窓はすべてが施錠されている。その鍵は師長管理であり、窓による換気ではなく機械による空調システムとなっている。窓が開く状態にある昼食時に使われる看護師の休憩室でさえもおいがこもり、換気されていない。それは、窓を開けない病院の日常が、換気をするという感覚を麻痺させていると思われる。ナイチンゲールの看護思想に戻り、換気をしていく必要性を痛感する。
- ・ 食事の質に関して、食事は必要なカロリーを摂取し、食欲を満たすものである。また、季節感や楽しさを感じ、豊かな心をはぐくむものであ

る。しかし、医療安全が優先され、卵の調理ひとつとっても、かたい目玉焼きが登場する。栄養バランスは良いが治癒力を高めるものではない。

- ・ かかわりの質に関しては、病院見学で看護師が無愛想に配膳している姿を体験した。そのときに、驚くとともに食欲減退につながる感じた。看護師は、ゆっくりしたペースで配膳等のケアを行う方がよい。入院患者は、一日のうちでなんの変化もなく、検温あるいは検査や治療を受けている。会話のなかでも、季節感や会話を楽しむコミュニケーションをとることが看護師には望まれるのではないか。

Ⅲ. まとめ

『病院覚え書』を読んで、患者にとって最良の環境とは、その時この患者の生命力の消耗を最小限になるように整えられた生活環境が必要であると理解できた。ナイチンゲールのよい看護とは、管理システムや病院設計の問題と切り離しては論じることはいできない。看護管理に関しては、看護師長や看護部長が責任を持つという今では常識的なこの観点は、さかのぼるとナイチンゲールの主張のひとつ“看護管理者”のあり方であることを学んだ。

現在の病院は、一般病棟で症状が安定すると早期に退院をする。または「地域包括ケア病棟」に転棟することで病相期と回復期の患者が同じ病棟、病室に入院することがなくなった。これらは、ナイチンゲールが目指したシステム化されつつあることを理解できた。

しかし、現代の医療現場や教育現場では、「何が看護で、何が看護でないのか」見失いつつあるのも事実である。研究会の参加者は、ナイチンゲールの看護思想を実際に看護実践に活かせることが増えつつある。今後も、ナイチンゲールの看護思想から看護実践に生かすヒントを学びたいと考えている。

文 献

- B. Abel-Smith. (1971/1981). 多田羅浩三, 大和田建太郎 (訳), 英国の病院と医療一二百年のあゆみ, 保健同人社.

- エキスパートナース編集部(編). (1989): ナイチンゲールって、すごい, 照林社, 東京.
- Florence Nightingale. (1860/1998). 小林章夫・竹内喜 (訳), 看護覚え書—何が看護であり, 何が看護でないか—, うぶすな書院, 東京.
- Florence Nightingale. (1863/2001). 小玉加津子, 薄井坦子 (訳), ナイチンゲール著作集第2巻 病院覚え書, 193-333, 現代社, 東京.
- Florence Nightingale. (1867/2001). 小玉加津子, 薄井坦子, 田村真 (訳), ナイチンゲール著作集第2巻 救貧院病院における看護, 3-47, 現代社, 東京.
- Florence Nightingale. (1882/2001). 田村真, 小玉加津子, 薄井坦子 (訳), ナイチンゲール著作集第2巻 看護婦の訓練と病人の看護, 75-123, 現代社, 東京.
- 城ヶ端初子, 井上美代江, 大川真紀子. (2017): ナイチンゲールの看護思想を実践に活かすための研究会の取り組みと課題 「ナイチンゲール看護研究会・滋賀」の歩みから, 聖泉看護学研究, 6, 19-26.
- 城ヶ端初子 (編). (2019): ナイチンゲールの看護思想を実践に活かそう 「ナイチンゲール看護研究会・滋賀」の学びと歩み, サンライズ出版, 滋賀.
- 金井一薫. (2011): “病院が病人に与える害”について—患者をとりまく病院環境についてのF. ナイチンゲールの指摘, 看護研究, 24 (2), 98-110.
- 金井一薫. (2014): ナイチンゲールの『看護覚え書』イラスト・図解でよくわかる!, 西東社, 東京.
- 金井一薫. (2019): 新版 ナイチンゲール看護論・入門—『看護覚え書』を現代の視点で読む, 現代社, 東京.
- 桶河華代, 高島留美, 松井克奈子, 他. (2019): ナイチンゲールの看護思想を実践に活かそう—ナイチンゲール看護研究会・滋賀」13回~19回例会を中心に—, 聖泉看護学研究, 8, 59-66.
- 薄井坦子. (1995): ナイチンゲール言葉集—看護への遺産, 83-86, 現代社, 東京.